あくしゅ

vol.1
2026

発行：宮城県児童養護施設協議会



イラスト：小百合園　高校１年

広報部会立ち上げについて

宮城県児童養護施設協議会
会長　菅原竜喜

本年度より、宮城県児童養護施設協議会において、広報部を立ち上げ、多くの関係機関の皆様を初め、東北ブロック児童養護施設協議会の皆様にも私たちが取り組んでおります活動を広報させて頂くことになりました。発行に向けてご尽力を頂きました皆様に厚く御礼を申し上げます。

さて、ご承知の通り、令和七年度から令和十一年度までの五年間を期間とする都道府県社会的養育推進計画が策定され、計画に沿って動き出しております。一方で児童虐待件数の増加や子どもを取りまく環境の課題は多様化、深刻化しているという現状もあります。この計画の策定要領では、市町村における家庭支援事業などを活用した予防的支援による家庭維持を念頭に、代替養育が必要な子どもに対しては、家庭養育優先原則に基づく里親等委託、児童養護施設などの小規模化かつ地域分散化が強力に促進されるなど、社会的養護は今まさに大きな変革期を迎えております。

社会的養護で暮らす子どもは、重い課題を抱えながら、子どもなりにその課題を心の奥底にしまい込み、懸命に日々を過ごしていると思います。そうした傷ついた子どもの心の回復と心身の成長を支援する専門家としての私たちの役割は今後も期待をされる重要な使命であると思います。

今年度から広報誌「あくしゅ」を発行するにあたり、各専門部会のご紹介をさせて頂く中で、変革期を見据えて、以前より、小規模化部会や里親支援部会なども県内施設職員が多くの話し合いを繰り返してきた中で、日々子ども達の成長や、里親さんとの良好な関係構築などを目指し、支援してきた実績があるとも自負しております。一方、こうした取り組みについて、広く多くの方に知って頂くという機会を見失っていたことについては反省をしなければならないとの思いです。

研修部会においては、人材育成や人材確保の観点から、保育士養成校への福祉の仕事ガイダンスへの参加を促したり、宮城県社会福祉協議会様のお力添えを頂きながら、積極的に研修会の企画や新人職員への研修会等、職員が安心して長く勤めて頂く環境を模索しながら、ケアする職員のケアなども含めて活動もしておりました。また、今後は心理職やＦＳＷなどの専門部会なども立ち上げ、より組織を活性化させ、充実した形を作り、施設で生活をしている子ども達の幸せを願いつつ、皆様に様々な角度からお伝えさせて頂きますので、宜しくお願いいたします。



社会福祉法人　善き牧者会
児童養護施設
小百合園

本体施設





お茶の時間を大切にしています。
年齢に合わせ、女子会
（性と生のおはなし）も定期的に開催。

“個”を大切に
お誕生日を特別なものに



子どもの誕生日ケーキは担当の手作り♥
子どもと担当が一対一で誕生日プレゼントを買う、
お出かけは1年で一番大切な時間です。

顔の見える関係性



建て替えまで大舎でみんなで生活をしています。
子どもも大人も楽しいことや困ったことをすぐに
みんなで共有できます。

職員は「眼前の一人の人生の子ども時代に、大きな影響を及ぼしうる存在なのだ」と自覚します。例えば風邪を引いた時の定番、泣いたり痛かったりした時のおまじない。一緒に分かち合った味や匂い声、感情景色など、様々な場面が子どもたちの力、原風景となるように、大切な記憶として留めてもらえる養育を目指しています。

（園長　古江　和夫）

社会福祉法人　旭が丘学園
児童養護施設
旭が丘学園

旭が丘学園は、地域小規模児童養護施設点睛・別家笑舞（各六名定員）を含む七十名定員の施設です。令和八年度には、小規模ユニットケアに移行し、新たな生活が始まります。

毎日子ども達と生活を共にし、春夏秋冬様々な活動・行事をしていますが、その中でもカレンダー印刷が特徴的な活動だと思いますので、ご紹介したいと思います。カレンダー印刷は、四十六年以上続いている伝統的な制作活動です。気仙沼の事をもっとよく知ってもらおうと言う意図で、様々な場所を散策し風景をスケッチした所から始まりました。シルクスクリーンという技法で制作しており、風景等をスケッチし原画を完成させます。色ごとに手作業で印刷していく流れになります。完成後はお世話になっている方々に感謝の意味を込めてお届けしています。担当と子ども達が力を合わせて作り上げていく物で、ただ完成させればいいと言う物ではなく、一緒に作り上げて行く中で、職員と子ども達の関係性がより強固な物となっていく大事な時間でもあります。







日々の関りを大事にし、子供たちの成長と幸せのために奮闘して行きたいと思います。









昭和十五年に司法保護団体本吉少年訓練所として児童の保護矯正の施設として発足し、昭和二十七年の社会福祉事業法の制定に伴い社会福祉法人に組織変更をし、養護施設　旭が丘学園として、八十五年を迎えました。長い歴史を引き継ぎ、今までも、そしてこれからも。

（園長　菅原　竜喜）

社会福祉法人　ロザリオの聖母会
児童養護施設　仙台天使園

一九三三年　聖ドミニコ修道会によって創設
二〇一八年　児童記録管理システムすこやか日誌導入
～園内どこにいても情報共有可能に～
二〇二二年　子どもアドボケイトの取り組み開始
二〇二五年　ＬＳＷ係発足
～子どもの過去・現在・未来を繋ぐ～











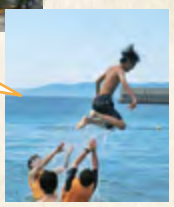


地域小規模児童養護施設も開設しています















仙台天使園は、キリスト教・カトリックの修道会が創設・運営の母体です。子どもたちには、祈ること、感謝すること、明るく美しい心をもつこと、自主的に責任をもって行動すること、困難にくじけず、正しく生きることを伝えています。

（園長　土倉　相）

社会福祉法人　仙台キリスト教育児院
児童養護施設　丘の家子どもホーム

丘の家子どもホームは小舎型の建物（家）で、「家庭的養育」を根幹に置き、子どもたちと生活しています。「家庭的養育」を大切にする中で私たち大人が特に力を入れていることは「食卓」です。大人が台所に立つと「今日のご飯何にするの？」と子どもたちが聞きます。「今日は魚料理にしようと思ってた。」に対して「やったー。」や「え～肉がよかった～。」と様々な反応が返ってきます。食卓に並ぶ料理は大人が基本的に一から調理しています。その料理を囲みながら〝一人の話（一つの話題）を皆で共有する〟を大切にしていて、その日の出来事を子どもたちが各々話します。楽しい話ばかりではなく、子どもたちが抱える悩みや不安の話にもなります。どんな話でも全員で思いや気持ちを共感していくのです。良いことも悪いことも分かち合うことができる場が家庭であり、「食卓」だと信じています。

私の所属するホームで人気のメニューは唐揚丼です。御飯の上に唐揚げを大量に乗せ、オーロラソースをかけた背徳感抜群のメニューです。「うまい！」「やっぱこれだよね」と口いっぱいに頬張る子どもたちの姿を見るだけで作った甲斐があります。美味しいご飯を食べて〝今日も良い一日だった〟と思ってもらえたら嬉しく思います。









当園は、仙台市青葉区小松島の丘陵地にある児童養護施設で、明治三九年（一九〇六年）に宣教師フランシスコ・Ｅ・フェルプスが飢えに苦しむ棄児七名を救済したことから始まりました。私たちは創設以来、より家庭に近い環境で、家庭的な雰囲気を大切に子どもの養育に取り組んでいます。

（施設長　藤田　毅）

社会福祉法人　ラ・サール会
児童養護施設　ラ・サール・ホーム

ラ・サール・ホームは社会福祉法人ラ・サール会が運営している児童養護施設です。

当施設は、小高い丘の上に建てられた本園のラ・サール・ホームと東仙台地区の星の家、昴、虹という三箇所の小規模児童養護施設があり、四つの施設に幼児から高校生まで男女合計で四十七名が入所しています。本園には現在、星座の名前の付いた六つのユニットがあり、それぞれの家風や特徴を持たせた支援を行っています。

本園の敷地内には、子どもたちの遊びの場となる大きなグラウンドや体育館があり、また商業施設や公共交通機関も近く通学や日常生活に適した環境が揃っています。

当園では、食育に最も力を入れています。毎年夏休みには本園のユニットごとでお楽しみとしてバイキングを行ったり、小規模施設の子どもたちがきて、栄養士や調理師とともにパン作りやうどん作りをしています。

また、本園ではより良い施設の運営を図るために子ども会という組織があります。子ども達から施設での生活に関する意見を聞いたり、一緒に行事計画を立てたり、困っていることや気になっていることはないか質疑応答を行う機会を定期的に設けたりしています。そのほかにも大人と子どもが一丸となって行う園内大掃除、芋煮会にバーベキューなどの行事を通して、ユニットを越えての顔の見える関係づくりを行っています。

小規模児童養護施設では一軒家で生活をしており、地域の中で一つの家庭のようにそれぞれが暮らしています。



地域小規模施設の子ども達が遊びに来て、食堂でパン作りに挑戦しました。

昭和二十九年男児のみの施設として開設、現在では男女混合施設として、本園は六つのユニットと三か所の地域小規模児童養護を持ち合わせ、子ども達と職員達が、日々、生活を楽しみ創っております。

施設で暮らした時間は、子ども達の人生の中に、確かに存在する大切な一部分として位置付けられていますので、そこに関わらせてもらっている私達職員は、常に、謙虚に誠実に、子ども達と共に育ち合おうとする姿勢を持って歩んでいきたいものです。

（園長　大塚　涼子）



園内をみんなで大掃除！
終わった後は、ご褒美に芋煮を楽しみました。



バイキングは毎年夏休みのお楽しみ。メニューは子どもからのリクエスト制で、中々見られない料理が並ぶこともあります。

広報部会活動

広報部会担当施設
旭が丘学園園長　菅原竜喜

今年度の新しい事業として、宮城県児童養護施設協議会に新たに広報部会を立ち上げ、令和七年六月に活動を開始いたしました。

毎年、東北ブロック各県で発行されております「〇〇県養護」など、各県の児童養護施設協議会様からお届け頂いている広報誌など拝見させて頂きながら、前に進むことができずにおりました。

前丘の家子どもホーム園長　鈴木重良先生とお酒を酌み交わしおりましたら、突然、「毎年、他県から送られてくる広報誌を見るとね、宮城県は広報誌を発行していないから、いつか宮城県の広報誌を作りたいと思うよね。」という優しい眼差しで私の方を見つめてボソッとお話を頂きました。これは私に「やれよ」という、無言の圧力を感じさせて頂きました。それを受けて、「では、鈴木先生、やりましょう」というお話をしたのが三年前の冬のことでした。そこから鈴木先生が在職の内に宮城県広報誌を作成しなければならないとの思いを持ちつつ、一昨年度でご退任というお話を受けてしまい、在任期間での発行が間に合わず、大変に申し訳ない思いで過ごしておりました。

今年度の宮城県児童養護施設協議会の事業計画を策定する際に、改めて、広報部会を立ち上げ、県内児童養護施設職員と共に様々な想いや願いを共有する中、表題を「あくしゅ」（ラ・サール・ホーム出身の作家　井上ひさしさんの小説「握手」）として、子どもが描いた宮城県地図を五施設が手を繋ぎ合うイメージを採用とするなど、表題から広報部員が楽しい雰囲気で集まり、色々な意見を出して頂けるが、広報部員は自分の意見よりも、他の人の意見を優先してしまうということも多くみられ、良い意味での集団の凝集性というか、奥ゆかしい人間性と品性、そして深い心遣いがある広報部員です。アイデア満載で年一回の発行で勿体ない気もするのですが、各施設の取り組みや宮城県独自の活動の報告やイベントなども多くの方が手に取りやすい文字や写真など広く活用し紹介させて頂きたいと思います。

遅ればせながらといったところは拭えないのですが、こうした活動を報告できる機会の助言を頂いた鈴木先生にも感謝をさせて頂きながら、そして施設で暮らす子ども達の幸せを願い日夜努力を惜しまず懸命に働いている職員の栄養素にでもなるような広報誌を目指して参ります。

どうぞ、温かい目で第一号の「あくしゅ」を読んでいただければ幸いです。



第一回　広報部会

研修部会活動

研修部会代表
丘の家子どもホーム　太田　聡

今年度、研修部会では主に①新任職員研修、②中堅職員研修、③福祉の仕事ガイダンスの準備運営を行っています。

新任職員研修は九月十九日にラ・サール・ホームを会場とし、県内五つの児童養護施設を対象として、一年目の職員を中心に実施しました。児童自立支援施設さわらび学園園長や児童相談所所長等を歴任され、現在児童養護施設等のスーパーバイザーとしてご活躍されている亀井義徳氏をお招きして、児童養護施設で働くにあたっての心構えや大事にすべきこと、法的根拠等を分かりやすく解説して頂きました。また新任職員に事前課題を提出してもらい、それをもとにグループ討議をした上でスーパーバイズをして頂くことで理解を深めることができました。受講者からは日常の業務に大いに参考としたいといった前向きな感想・意見を多く頂き、新任職員同士の横の繋がりを感じる良い機会にもなりました。

中堅職員研修は、十一月十八日に宮城ハートフルセンターを会場とし、研修部会として初めて処遇改善加算対象の認定を受けて開催しました。講義Ⅰ「チームケアと中堅職員の役割について」では新任職員研修でもご講義して頂いた亀井義徳氏に、講義Ⅱ「小規模グループケアリーダー等への指導・教育（スーパーバイズ）の方法」および講義Ⅲ「職場の問題解決」は東北福祉大学総合福祉学部教授の田中尚氏にご講義頂きました。中堅職員として必要なスキルや考え方など、グループ討議を通して学ぶことができ、全体を通して約九十二％の受講者から「満足」または「やや満足」の評価を得ることができました。


中堅職員研修の様子


新任職員研修の様子

③については令和八年一月二十五日に宮城ハートフルセンターで開催を予定しており、鋭意準備中です。こちらは次年度から広報部会に業務を移行することになりましたが、引き続き児童養護施設の魅力を多くの方に発信できるよう取り組んでまいりたいと思います。

小規模化部会活動

小規模化部会代表
仙台天使園　下山　政樹

宮城県児童養護施設協議会小規模化部会は、各施設の施設長や主任級職員、地域小規模担当職員が集まり、施設の小規模化へ向けた課題や取り組みについて共有し、それぞれの施設の歴史、文化、特性を生かした運営を尊重し合い、協力、協働しながら課題解決に向けて活動を行っております。時には宮城県、仙台市の担当者にもご参加頂き、施設だけでは解決できない課題について一緒にご検討頂いています。

当部会は、令和元年度より活動をおこなって参りました。当初は地域小規模児童養護施設開設に向けた課題解決を中心に活動が行われましたが、地域小規模児童養護施設開設に向けたガイドラインを作成したことを区切りとして、現在は主に本体施設の小規模化に向けて活発な意見交換が交わされています。

また令和五年度からは地域小規模担当職員を中心とした意見交換会を年一回開催しており、毎回五十名以上の参加があり、グループ毎に分かれて日頃の養育について前向きで熱い意見交換を行っています。

現在、それぞれの施設が様々な課題に直面しながらも子どもたちにとってより良い生活を送るために整備を進めております。共通認識は「小規模化が目的ではない」ということです。小規模化された環境において、地域に溶け込み、子どもたち一人ひとりに合わせたオーダーメイドの養育を、日々のいとなみを通しておこなわれることが大切であり、施設の小規模化は、あくまでそのための手段であります。

「令和」という元号には、人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ、という意味が込められているそうです。令和元年に活動が始まった当部会においても、本質を忘れることなく、それぞれの施設が知恵を出し合い、心を寄せ、今託されている子どもたちの最善の利益を求め、歴史ある宮城県の児童養護施設の中に豊かな養育文化が生まれ育つよう今後も活動を行って参りたいと思います。


ラ・サール・ホーム　地域小規模児童養護施設「虹」

里親支援部会活動

里親支援部会代表
丘の家子どもホーム　大内治子

里親支援部会は、県内四か所の児童養護施設の里親支援専門相談員と里専を配置していなくてもご協力いただける児童養護施設に加え、二か所の乳児院の里親支援専門相談員、計七名が毎月一回、部会長である仙台天使園・土倉園長の元に集まり活動をしています。今年度は八施設のうち三名が入れ替わりとなり、新たな気持ちで活動をしているところです。

部会の活動は、元々は里親支援専門相談員が配置された当初から、児童養護施設が主催する未委託里親向けのサロンを開く活動はしていたのですが、さらなる情報共有と各施設連携して活動を展開するために、令和二年度に宮城県児童養護施設協議会の中に里親支援委員会を立ち上げていただいたところから始まります。県養協の中にある一部会ではありますが、主旨をお伝えし理解をいただいて乳児院も共に活動しているところは一つの特徴です。

支援部会としての主だった活動は、里親支援広報誌「結」の発行と、未委託サロンの開催にはなりますが、定期的に集まりを持てる場があることで、各施設の実態と里親支援の状況をお互いに共有できる場があることで、むしろ施設ごとに動いていた時よりも全体としての統一感を持てていると感じています。

例えば里親会行事への協力依頼には、施設ごとそれぞれに依頼をいただくやり方から、部会として受ける形とし、メンバー各自予定を調整し合って必要に応じた人数への依頼に応えられるようにしました。以前であれば、「どこは来てくれた（来なかった）」となっていたところから、部会で何人の協力があったというイメージに変化したことで、担当者間のやり取りもスムーズになり、関係性も強くなったと感じているところです。

さらに今年度は、みやぎ里親支援センターけやきの協力を得て、近年急増している「実家庭との交流のある里親委託」をテーマにイベントを計画することにしています。

里親養育に期待されるボリュームが年々広がっている中、児童養護施設として里親家庭のためにできることは「何か」を考え、今後の活動を展開していきたいと考えながら活動しています。


未委託サロンの開催



里親支援広報誌「結」

編集後記

今回、宮城県児童養護施設協議会（以下「県養協」という）の広報誌、第一号を無事発行することができ、大変嬉しく思います。発行に際し、原稿に協力してくださった各児童養護施設長、各部会の皆様、誠にありがとうございます。

県養協の広報部会が発足したのは、令和七年六月。宮城県らしい広報誌にするにはどのようにしたら良いのか、試行錯誤しながらの初めての広報誌作りが始まりました。ポップで読みやすく、目を引くようなもの、児童養護施設をより理解してもらえるような、将来、どんな方にも手に取り見てもらえるような広報誌になることを想像しながら作りました。表題をあえて平仮名にしたのも温かいイメージにしたかったからです。

宮城県を両手で抱えている表紙のロゴは、施設の子どもに描いてもらったものをアレンジしました。広報誌のロゴ、そして表題「あくしゅ」は、宮城県に五つある児童養護施設が手を取り合い、協力、連携していることを表現しています。これからもより良い施設作りを目指し、切磋琢磨しながら子どもたちのために日々尽力してまいりたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

広報部会代表
仙台天使園　遠藤早恵

1. 運営方針

1）目的

会員である全児童養護施設協議会並びに、東北ブロック児童養護施設協議会との連携と協力をはかり、施設養護の実践と研究活動を推進し、宮城県における児童養護施設の事業の発展に寄与することを目的とする。

2）事業

- 宮城県児童養護施設長会議の開催
- 小規模化部会の開催
- 里親支援部会の開催
- 研修部会の開催
- 宮城県児童養護施設協議会の広報部会の開催
- その他本会の目的を達成するため必要と認められる事業の開催

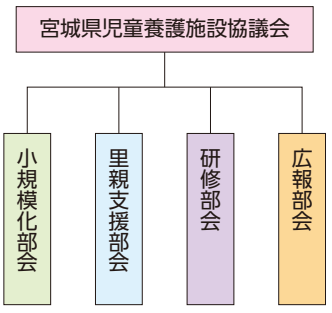
3. 役員構成

会　長	1名
副会長	1名
会　計	1名
監　事	2名

4. 会員施設数

5施設（50音順）
旭が丘学園
丘の家子どもホーム
小百合園
仙台天使園
ラ・サール・ホーム

5. 組織図



（令和７年４月１日現在）